

## 編集後記

今号をもって、『言語学論叢』が無事 20 号を迎えることができました。ひとえに皆様のご協力・ご尽力があったからだと心より感謝いたしております。

20 号を 1 つの節目として、今号はいつもの論文誌の形式に加え、記念号として、筑波大学における一般言語学・応用言語学両コースの歴史を振り返る記事を掲載しました。お忙しい中、原稿を執筆していただいた先生方には、この場をかりて心よりお礼申し上げます。

開学当初から関わっている先生方や、当時大学院生であった諸先輩方からのご寄稿によって、筑波大学における両研究室の状況が鮮明に蘇ることと思います。また、筑波大学の前身である東京教育大学の時代からの流れもここに記すことによって、歴史の重みを十分実感すると同時に、今後、身を引き締めて精進していかなければならないことを痛感いたしております。

現在、一般言語学研究室では『一般言語学論叢』、応用言語学研究室では『応用言語学研究』といったようにそれぞれ自前の論文誌も出すようになりましたが、それでも『言語学論叢』が最も古いことには変わりはありません。また、両研究室が共同作業を行なえる貴重な場でもあります。今後も続けて発行していくことは、在籍する大学院生の責任であると強く感じており、書く場が増えたのだからこそ、もっともっと多くの研究成果を発表していきたいとも考える次第であります。同時に諸先輩方からの寄稿も大歓迎です。『言語学論叢』の発展のためにも玉稿をお待ち申し上げます。

私事としては、17 号から 4 年にわたって『言語学論叢』の編集代表を務めてきましたが、何よりも「諸先輩方が築かれた歴史を壊さないように」と雑誌の継続に力を注いできました。20 号までたどり着いたことで、肩の荷が少し下りたと同時に、満足感もあります。しかし、これが終わりではないことも十分心得ております。さらに号を重ねていくことが、両研究室だけでなく言語学・音声学という学問の発展にも貢献できるとかたく信じて、邁進していきたいと思っております。

今後とも『言語学論叢』との永いお付き合いをよろしくお願いいたします。

編集代表 福盛貴弘